遠き日の球音への郷愁

＝昭和二十年代の福生野球場小史＝

児島亀之助

福生市発行の市勢要覧のいずれの年表を見ても、ほとんどの公共施設の完成年月日が記されているが、福生市営野球場だけはなぜか記録がない。

そこで開設当時の思い出を綴ってみた。

福生野球場の建設が始ったのは昭和二十四年春である。当時、福生中学校は現在の第三小学校の所にあり、私も四月から中学生として通い始めたが、学校前は草木もまばらな広大な荒地で、大きな石ころが散乱し、現在の忠霊塔附近は西部劇を思わせる赤土の小高い丘となっていた。

この一面の空地へ何台ものダンプカーが大量の石炭がらを横田基地から運んでおり、はじめは何ができるのか全くわからなかったが、それが野球場であると気がつくまではそう日数はかからなかった。段丘という地形をうまく利用して観覧席ができ、また一面に敷きつめられた石炭がらの上には土が敷かれ、高く盛り上った所がピッチャープレイトであることはそれとなくわかったからである。石炭がらは水はけをよくするための手段であった。

私は毎日通学途中、この工事を眺めながら完成を待ちわびたものである。なぜなら、当時は大人も子供も大変な野球ブームで、おのづと関心を寄せていたからである。

戦後の混乱した世相の中で、子供たちに夢をいだかせたのが川上の〝赤バット〟、大下の〝青バット〟であり、物資の乏しい時代ではあったが、みんな手製のグローブやボールを持って校庭やあらゆる空地で野球に熱中した。「六・三制野球ばかりうまくなり」などという新制中学校を軽蔑するような流行語もはやったが、こんな言葉もなんのその、来る日も来る日も野球であった。長い間空襲〳〵で怯えながら防空壕生活を余儀なくされた当時の子供達にとって、平和が甦った青空の下で野球に親しむことは、何よりの楽しみだったのである。

この野球場ができるまでの経緯は、福生市保存の資料によると次のとおりである。

すなわち、昭和二十三年六月、次のような町有地貸付申請書が福生町に出されている。

町有地貸付申請書

今般左記計画に依りまして運動競技用グランドを設置致し、それが維持管理運営を実施致し度思いますので格別の御詮議によりまして町有地貸付方御認可相成度此段申請致します。

記

一　目的

終戦後漸く落着きたる国民生活の中にスポーツに対する一般国民の関心の昂りたること他に其の比を見ざる所であります。

此の際速に専用運動場を設置致し郡内の主たる競技は勿論中央スポーツ界の有名競技を当町に誘致し、間接的に郷土の発展を増進すると共に健全なるスポーツの普及に依り、国民体位の向上とスポーツ娯楽の満喫に依り、再建日本の国民生活に真に明朗性を附与すべく本計画を企画したものなり。

一　貸付希望土地

東京都西多摩郡福生町大字熊川字武蔵野一〇六〇―一番地

総面積　五四一六坪

一　施設　野球用施設及び一般競技施設

（中略）

昭和二十三年六月

東京都西多摩郡福生町福生七八九番地

多摩新産株式会社

代表者　田　村　市　郎

福生町々長　岸徳次郎殿

以上が申請書の概要であるが、この趣旨は福生町議会で了承され、多摩新産株式会社により着工完成の運びとなった。この施設は、昭和二十四年（一九四九）八月三十日福生町に移管されるが、完成にともなうグランド開きが行われたのは、昭和二十四年六月十二日、麦秋の快晴の日であった。

待ちに待ったこの日、私も早朝より出かけたが、福生のみならず近隣からも多くの観客がつめかけ、いっぱいであった。

グランドと観覧席は石垣で区分され、外野も石垣の上に緑の板塀が立ち、町内の商店の広告が書かれ、初夏の太陽が一面に明るく降り注いでいた。

当日は都立国立高対中野高（現明大中野高）、福生町の硬式の代表チーム多摩新産対東鉄の試合が行われたが、カーン〃という硬式の打球音に観衆のどよめきがおこり、その一挙手一投足に熱い視線を送った。

戦後四年、人々は茫然自失の状態から徐々に抜け出て、再建日本のために立ち上ったが、空襲（B29）、焼跡、食糧難などの暗い思い出が脳理から完全に去らぬ時であり、この悪夢の払拭と軍国主義からの解放感を野球に求めたのであろう。

わき上る歓声とともに明るい雰囲気がグランドを包んだ。

私自身も筆舌には尽しがたい嬉しさが、身体全体にこみ上げてきたのを覚えている。

当時の牛浜駅東口の風景は、まだ麦畑の中に家があるという感じで、駅の出入口は現在と反対の拝島駅寄りにあり、駅前には基地の外人用のおみやげ店やハンカチに裸婦の絵を画く小さなバラック建ての絵かきの店などが点々と建ち、朝夕は横田基地に通う多くの人々が黙々と長蛇の列をつくっていた。

換言すれば駐留軍一色に塗りつぶされた、きわめて受身的な殺伐とした風景であった。

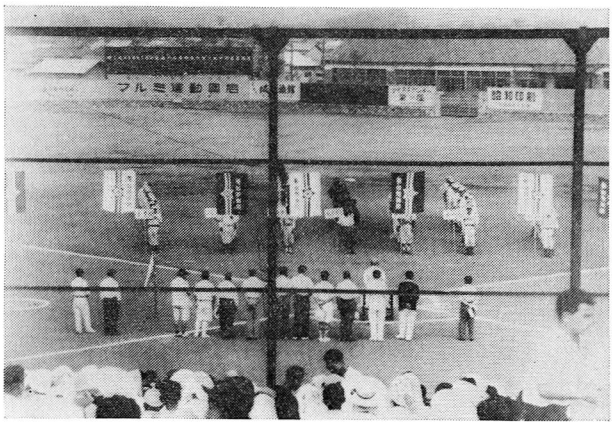
このような雰囲気の中での野球場の完成は、子供心にもアクチブなまちづくりのすばらしさをそれとなく感じたのかも知れない。

活気に満ちた明るい野球場の光景は、あたかも低くたれこめた雷雲が去って、眩い太陽が輝いたような感さえあった。

この日一番印象に残ったのは、都立国立高対中野高戦であった。試合は両左腕投手の息づまる投手戦がすすみ、三対一で中野高が逆転勝ちしたが、この時の国立高の投手が昭和五十五年夏、都立高として始めて甲子園に出場した国立高の監

督市川氏であり、中野高の投手が翌年巨人軍に入団し、昭和二十六年に十九連勝した松田清投手であった。市川投手の巧投と松田投手の鋭いカーブが、今でも脳理に焼きついている。

また、多摩新産と東鉄の試合も行われ、東鉄が勝ったが、多摩新産の投手は、戦前プロ野球の金鯱（きんこ）（現中日ドラゴンズの前身）で活躍した古谷倉之助投手であった。投球フォームやグラブさばきなど、いかにもプロで慣らした選手という感じで、子供の目から見ても異色の存在であった。



都市対抗野球予選（後方は福生中学校）

この年の夏、毎日新聞社主催の都市対抗野球大会の東京都及び南関東大会予選が福生町後援のもとに行われ、都下の多くの野球ファンが集った。

多摩新産も福生町の代表として出場し、地元民も熱心に応援したが、戦力的には野村投手、長島捕手（翌年毎日オリオンズへ入団）のいた全豊岡が断然強く、次いで元阪急の山田伝選手のいた全府中といった感じで、多摩新産は古谷投手のワンマンチームといった印象が残っている。

この大会で全府中の中堅手山田伝選手は、打力もさることながら、どんな球でもへその位置で捕球するため、〃へそ伝、へそ伝〃と言われ、大変な人気であった。しかし、多摩新産の戦いぶりについては、翌日いつも学校で話題となり、子供同士でもいろ〳〵と話し合ったものである。

今にして考えると、子供たちでさえ、それだけ熱心に声援を送ったということであろう。

現在、福生市でも新住民の増加により、住民階層は大きく変化しているが、なにか市民の心を一つに結ぶものが欲しいような気がしてならない。アメリカ大リーグにおいては、都市ごとにフランチャイズがおかれ、市民は熱烈な声援を送っているし、イギリスウェールズ地方のラグビーチーム〃オールウェールズ〃の戦いぶりは、地元民の心の支えになっているという。市民の心を結び市民意識の向上を図るには難しいコミュニティ論を述べることも必要であろうが、こんな方法もよいのではないだろうか。

なお、現在田村建設工業株式会社専務取締役の金親辰夫氏は戦前都市対抗野球の大連満鉄クラブで活躍し、多摩新産でも主将をつとめたが、当時のベストメンバーをお聞きすると次のとおりである。

昭和二十三年に生れた多摩新産も、昭

多摩新産ベストメンバー

(二)	小川　進	
(中)	清水喜一	
(遊)	金親辰夫	
(投)	古谷倉之助	(監督)
(捕)	平野久一	
(一)	野和田敏男	
(左)	平井賢治	
(右)	渋沢大三	
(三)	田村芳夫	

和二十七年には建設事業が主体となり、練習もままならず、主力選手は立川AIOに移籍し消えゆくこととなる。

しかし、短期間であるが住民の心をかきたて都市対抗野球に出場したことは、市の歴史にとどめておくべきことであろう。

巨人対国鉄

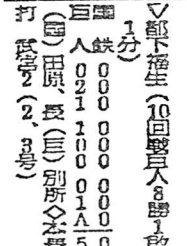
プロ野球巨人対国鉄の公式戦が行われたのは、昭和二十五年八月九日である。おそらく当市におけるプロ野球公式戦は、この試合が最初にして最後であろう。

この知らせを聞いた時、私自身小おどりしたものである。なぜなら当時のプロ野球は富裕な家の子供は別として、後楽園球場まではなかなか見に行くことができず、テレビもない時代、ほとんどの子供は駄菓子屋で売っているプロ野球選手のプロマイドを集めたり、尚文館発行の雑誌〝野球少年〟を読んで選手の顔を覚え、志村正順や岡田実の名調子のラジオの実況放送を聞くのが常であり、目のあたりに選手を見るなどということは夢に等しかったからである。

当日は、私もいち早く一塁側巨人ベンチ前に座ったが、水原監督の引きいる巨人軍の川上、千葉、青田、別所選手などがグランド内に入ってきた時は、国鉄の入場とくらべ、一きわ高いどよめきがおこった。

昭和二十五年は、前年まで一リーグ八チームで行われたプロ野球が、セ・パ両リーグに別れた最初の年であり、セ・リーグでは大洋・西日本・国鉄・広島がノンプロの選手を主力として誕生したが、国鉄は左記に見るようにスター選手もいず、戦力はきわめて低かったのである。四百勝投手金田正一氏はこの年の秋、享栄商を中退して国鉄に入団している。

試合は巨人軍が別所投手の好投と全員安打で五対〇と圧勝したが、子供の目から見て輝くばかりのまばゆい存在であった川上・千葉・青田・別所選手などの見事なプレーを目のあたりに見ることができ、大変感動した。


▽都下稲生（10回裏巨人8勝1敗）
1分
巨人　000 000 000 0
国鉄　021 100 01A 5
（巨）田崎、長（三）別所◇本塁打　長2（2、3号）

昭和25年8月10日
朝日新聞より

おそらく多くの野球ファンが私と同じ気持をいだいたことであろう。

浅黒い長身の別所投手が、試合開始と共にピッチャープレイトが曲っていると言うアピールをしたことも、忘れ得ぬ思い出である。

試合終了後、サインボールの投げ入れがあり、一塁側ベンチの上にいた私に、青田選手が「坊や、ほら」と言ってやさしくボールを投げてくれたが、今でもブラウン管を通して青田氏を見るたびにこのことが思い出される。

もう青田さんも白髪が目立ち、別所さんも眉毛まで白くなっているのを見るに

巨人	打数	安打	打点
(右) 萩　原	5	1	0
(左) 小松原	5	1	0
(二) 千　葉	3	1	0
(一) 川　上	3	1	1
(中) 青　田	4	1	0
(三) 手　塚	3	1	0
(捕) 武　宮	4	2	3
(遊) 内　藤	4	1	0
(投) 別　所	4	2	1
	35	11	5

・本塁打　武宮　2号，3号

国鉄	打数	安打	打点
(右) 藤　田	4	1	0
(中) 荻　島	2	0	0
(代) 土　屋	1	0	0
(捕) 宇佐美	3	1	0
(一) 森　谷	3	0	0
(左) 小田切	3	1	0
(三) 千　原	2	0	0
(二) 福　田	2	1	0
(二) 土佐内	1	0	0
(投) 田　原	2	0	0
(代) 村　松	1	0	0
(投)　長	0	0	0
(遊) 中　村	3	1	0
	27	5	0

つけても、歳月の流れを感じる今日この頃である。参考までにこの試合のメンバーを紹介すると右のとおりである。

（東京読売巨人軍資料室提供）

なお、この時の福生野球場と試合の様子は、雑誌名は忘れたが、野球雑誌（昭和二十五年十月号と思われる）に〝石垣の球場は珍らしい〟ということでグラビヤで詳しく紹介された。

私も機会あるごとに神田の古本屋で探しているが、なかなか見つからない。読者の中でご存知の方がいれば貴重な記録になると思う。

青竜旗（国立高校保存）

東京都下高等学校野球大会（青竜旗大会）

昭和二十四年から昭和三十年まで、福生町主催並びに朝日新聞社後援により都下高等学校野球大会が行われ、青竜旗を目ざし熱戦が展開された。

私は中学一年から高校三年までこの大会は欠かさず見て、すっかり高校野球の魅力にとりつかれ、爾来今日まで夏の甲子園大会の予選が始ると落ちつかない日々を送っている。

男女共学もまだ軌道に乗らない時代であり、現在のような派手なチアーガールの応援はなかったが、笛や〝どうこ〟をたたく応援もあって、まさに青春の熱き戦いであった。この大会がどれほど青春の血をわかせたかは、私の高校時代のクラスメートの練習に打ち込んだ姿からも容易に想像することができる。

当時も夏の甲子園大会が第一目標であったが、好選手を集めた都内の明治高・早実・日体荏原高や日大勢にはなかなか勝てず、甲子園は遥かに遠く、はたして都下ではどこが一番強いかを決めるこの大会は、多くの人たちの興味をそそったのである。

昭和二十五年都立第二商業の名捕手として活躍した笹本修司氏（福生市志茂一三七）の話によると、野球用具も十分そろわない時代であり、当初は米軍横田基

地からボールやバットが寄贈されたが、米軍のボールは一まわり大きくプレーしにくかったということである。

ともあれ、都下の野球場が十分整備されない時代、一地方自治体が町のわくを越えてこの大会を実施したことは特筆に値しよう。

なぜなら戦後の貧しき時代に都下高校野球児に明るい希望をもたせると共に、レベルアップにも大いに貢献したと思われるからである。

昭和二十年代には甲子園出場を果せなかった都下勢も、昭和三十五年にはようやく法政一高が春の選抜大会に出場しているが、この大会も基礎づくりの遠因になっているものと思う。

なお、歴代優勝校は次のとおりである。

第一回　昭和二十四年　都立国立高（都立立川高）2A：1

第二回　昭和二十五年　都立国立高（都立二商）3A：2

第三回昭和二十六年　都立南多摩高（都立国立高）8：7

第四回　昭和二十七年　都立農林高（不明）

第五回　昭和二十八年　不明

第六回　昭和二十九年　都立国立高（都立八王子工業）9：0

第七回　昭和三十年　都立国立高（法政一高）6：4

注（　）内は決勝戦進出校

毎年熱戦が展開され好選手が多かったが、プロ野球に進んだのは剛速球の二商の松村投手（毎日オリオンズ）、法政一高の山崎投手（法大――巨人で活躍）がいる。

その他、私の記憶の貝塚を掘りおこしてみると、印象に残った選手の顔が彷彿として浮んでくるが、この青竜旗大会の思い出を胸に社会でそれぞれ活躍していることであろう。

長い間、夏の甲子園大会の解説者でおなじみの松永冷二氏（法大監督時代は田淵・山本浩二・富田の法大三羽ガラスを育てた）も、法政一高の監督としてこの大会に参加している。

なお、昭和二十九年、この大会で活躍した八王子工業高校の水村捕手が、秋の新人戦でこめかみに死球を受け、その後死亡するという誠にショッキングな事故があったことは悲しい思い出である。

「もし当時もヘルメットがあったらなあ」と時々思うことがあるが、このことが原因で現在のヘルメット着用となった。

この大会は、昭和三十年をもって終ったが、昭和三十一年の経済白書が「もはや戦後ではない」と謳ったことを思うと、まさに戦後の〝青春のイベント〟であった。

私は今でも福生野球場に立つと当時のいろ〳〵な光景が甦ってくるが、なぜか最も鮮明に脳裡に浮かぶのは、味方の外野手が敵の大飛球を追って背走を続ける姿である。

そして、その姿に結果の是非はともかく、一つの目的に向って進む過ぎ去りし青春時代の美を見い出している。

福生野球場は、私にとって青春時代への大切なタイムマシンである。

注　現在の野球場は、昭和五十四年に大改修されたものであり、昔日の面影はほとんどない。

（こじま・かめのすけ　地方公務員　熊川在住）